

# Young Kant's Earthquake Theories –In an age of optimism–

Yutaka Ishigami

*The Lisbon earthquake* that occurred in the middle term of the 18th century had a big impact on the whole of Europe. It also caused some argument concerning optimism. Kant had finished writing *three earthquake theories*. It was written in the form of a scientist calmly analyzing the phenomenon of the earthquake.

But the viewpoint of the humanity was conscious for himself as something important to support himself. While *Seven Year's War* (1756-63) was drawing near at that time, the image of the people suffering from a hardship had these two dimensions in Kant's mind. It can be said that the time of his earthquake theories was a time in which he lived as a "moralist".

# 若きカントの地震論

— オプティミズムの時代の中で —

石 神 豊

《概要》18世紀の中期に生じたリスボン地震は、ヨーロッパ全体に大きな衝撃を与えた。それはオプティミズムをめぐる議論をも引き起こした。カントは3本の地震論を書き上げたが、そこには冷静に地震現象を分析しようとする科学者の姿がある。しかしそうしたカント自身を支えるものとして人間愛の立場が彼自身に意識されてくる。当時、七年戦争の戦火が迫る中、カントの脳裏には苦難にあえぐ人々の姿が二重写しになっていた。彼にとって地震論の時代とは、モラリストとして生きた時代であった。

## 1 リスボン地震の波及

1755年の11月1日に生じたリスボン地震は、ポルトガルの首都リスボンを中心として死者だけで数万といわれる大地震であった。その直接の振動による建物の瓦解だけでなく、津波は川の上流にまで被害を及ぼすとともに、港湾施設は火災にも見舞われた。この甚大な被害をもたらした大地震のニュースは直ちに各国地域に広がり、直接被害を受けたポルトガルのみならず全ヨーロッパに、大きな心理的動揺そして思想的動揺をもひきおこした。

同じヨーロッパとはいえ、ポルトガルとは地理的に遠く離れたドイツではどうであったか。ゲーテは自伝『詩と真実』のなかでつぎのような回顧をしている。リスボン地震が起こったとき、ゲーテはわずか7歳の少年であった。

異常な世界的大事変が生じて、私の心の平安は生まれて初めて根底から揺るがされた。1755年11月1日、リスボンに地震が起こって、長らく平和と安泰になっていた世界に恐るべき衝撃を与えた。大きな商業都市、港湾

都市である壮麗な首都が、なんの予告もなくもっとも恐るべき不幸に見舞われたのであった。……（中略）

他人の不幸によって揺り動かされた人々の心は、この爆発の広範な影響についてますます多くの、また詳細な知らせがあらゆる方面から伝えられるにつれて、自分自身と自分の家族に対する憂慮によってますます不安な気持ちにさせられた。恐怖の悪霊がかくも迅速に、かつ強力に、その戦慄を地上にくり広げたことは、おそらくかってないことであった。

このすべてを繰り返し聞かされた少年の心は、少なからず揺るがされた。信仰箇条の第一条の説明によって、賢明で慈悲深いものと教えられてきた天地の創造者にして保持者たる神が、正しい者も不正な者も等しく破滅のふちに投じることによって、万物の父たる実を示さなかったのである。少年の心は、これらの印象から容易に立ち直ることができなかった。ましてや、哲学者や神学者でさえ、この現象をいかに解すべきかについて一致することができなかったのであるから、いよいよもってそれは困難な事であった。<sup>1)</sup>

多感な少年ゲーテがリスボン地震の悲惨な状況を知って、子供心にも思い悩んだことがここに回顧的に述べられている。彼の生涯においてはじめて、信仰に関連しての大きな心理的動揺がひきおこされたのであった。正、不正に関係なく、無数の多くの人々が等しく禍にあうという事態に、なぜ万物を愛し保護するはずの神がそうされたのかと、神への疑問を抱いたという。しかもこの神義論的課題は、ゲーテのみならず多くの哲学者や神学者も解くことができなかったということを付け加えている。おそらくこの付加は、リスボン地震を契機としておこった議論を踏まえてのものであろう。

時を経て成熟するゲーテの思想形成において、こうした少年時代の原体験が大きな影響を与えていったことは容易に推察しうる。のちに、スピノザ『エチカ』との邂逅を経て汎神論に近づいたゲーテが、いわゆる超越神あるいは人格神という神観に強く反発していったのも、少年時代の体験にその根の一つがあった

ことはおそらく間違いない。

カントの場合はどうだったか。カントは1724年生まれであるから、リスボン地震があった1755年は31歳の時であった。彼の反応はきわめて素早いものであった。

カントは地震直後の数か月のうちに、地震に関する論文を矢継ぎ早に3本発表した<sup>2)</sup>。それは、①「昨年末ごろにヨーロッパの西方諸国を襲った非運を機縁として地震の原因について論ず」（『ケーニヒスベルク週報』）、②「1755年末に大地の大部分を見舞った地震による数々の珍事に関するイマヌエル・カント修士による歴史と博物誌」（単独の著作として出版）、③「近年認められた地震に関するイマヌエル・カント修士の再考」（『ケーニヒスベルク週報』）の3本である（以下では、順に第一論文、第二論文、第三論文と呼ぶ。本稿では第一、第二論文についてみるが、第二論文の補遺としての第三論文についてはとくにとりあげない）。いずれもリスボン地震を直接の論文執筆の動機とした論考であり、そのほとんどのページを地震の科学的な分析と考察に割いている。

カントがなぜリスボン地震に対してそれほどまでにこだわり、しかも短時日の間に3本も論文を発表したのだろうか。じつは地震の起こる前年に、彼は「地軸の回転によって地球がこうむる変化」、「地球は老衰するか」という論文を発表し、つづく翌年、つまり地震のあった年の春には『天界の一般自然史と理論』という（のちに「カント=ラプラス星雲説」としてカントの見解が学界に認められることになる）著作を匿名で発表していた。こうした当時の彼の著作からも、彼の直接の研究対象が天文学ないしは地球科学という領域にあったことが知られるのである。したがって、カントが住んでいるケーニヒスベルクからいえばヨーロッパ大陸の反対側に起こった地震についても、なんらかの見解を発表することはそれほど特別なことではなく、むしろ知識人としての自分の義務であると考えたのではないか。

## 2 オプティミズムをめぐって

当時のカントの研究動向を調べてみると、この時期のカントの論文執筆が、

ベルリン・アカデミーの懸賞論文のテーマと密接に連動していることがわかる。ベルリン・アカデミーはライプニッツが創設したドイツのアカデミーであり、時代をリードする研究機関であった。1752年の懸賞論文のテーマは「地球の自転は変化したか」というものであった。そして翌1753年に示されたテーマは「ライプニッツに依拠するポーブのオプティミズムについて」であった（1755年締切り）。アレキサンダー・ポーブ（Alexander Pope, 1688-1744）はイギリスの詩人、批評家であり、ライプニッツのオプティミズム思想を*Essay on Man*と題した詩集に展開し世に流布したことで知られている。

18世紀はオプティミズムの時代だということができる。オプティミズム（※*optimisme*〔仏〕という言葉は18世紀になってからラテン語の*optimum*〔「最適な、最善の」〕という形容詞〕からつくられたとされる）は、一般には楽天主義、楽観主義と訳されることが多く、ものごとや事態のなりゆきをすべて良い方向に考える心理的傾向を指す言葉とされている。18世紀においてこの楽観的な心理を支えるものとして、科学的な知識の進展がこれからの明るい社会を約束しているという科学主義（*scientism*）への信仰があったといえよう。産業の発展とともに経済力が高まり、都市ではとくに時代の進展に楽観的な思いを抱く人も多くなっていたといえる。このように理解されたオプティミズムは、この18世紀という啓蒙時代の市民意識（とくにイギリス、フランスにおけるそれ）を反映していたといえてよい。

しかしそうしたオプティミズム理解は、あくまで心理的あるいは感覚的なものである。オプティミズムは思想的にはライプニッツに由来するとされるのであるが、本来ライプニッツではオプティミズムは「最善観」というべき思想あるいは哲学であり、けっして楽観的（いわゆるオプティミスティック）な心的傾向をさす概念ではなかった。ライプニッツのオプティミズムは一種の宗教的世界観ともいえ、定式化された表現をすれば、「神が創造したこの世界は、考えられうるかぎりの世界の中で、最善のあり方をしている」という世界観である。この思想は、世界に部分的には悪が存在するとしても全体としてみられたときには世界は最善なのであるという予定調和の考え（一種の摂理観）と結びついている。

リスボン地震が起こった頃は、カント自身、オプティミズムに関して大きな関心をもって考察していたに違いない。カントの考察はむしろ樂觀的という意味のそれではなく、世界観としてのオプティミズムに向けられていた。

1755年の11月1日、現実には生じた大地震は、津波を伴ってたいへんな数の犠牲者を出したのであった。しかもこの11月1日はすべての聖人を祝う万聖節の日に当たり、多くの人々が教会に集っていたこともあり、礼拝の最中の地震によって教会の下敷きになり、命を落とした人も相当いたといわれる。このいわば突然に襲った悪の来襲ともいふべき悲惨な出来事を前に、この世界を最善のものとして理解するオプティミズムはなにを語りうるのか。

ヴォルテールは『リスボンの厄災についての詩 *Poème sur le désastre de Lisbonne*』(1756)のなかで、「<すべては善である (Tout est bien!) >と叫ぶ、欺かれた哲学者たちよ」<sup>3)</sup>とオプティミズムとその唱道者を強く非難した。ヴォルテールが批判の対象としたオプティミズムは、ライプニッツの『弁神論 *Essais de Théodicée*』のものであったというより、ライプニッツの思想を詩の形で刊行し世間に流布したポープのものであったといわれるが、さらに正確にいうならば、ヴォルテール自身が独自に解釈を加えたオプティミズムであったといえる。

ポープの『人間論 *Essay on Man*』(1733-34)の「書簡1」の末尾は、

生まれる時も、死ぬ時も、安全に、  
唯一の摂理の神の手の中にあるのだ。  
自然全体は汝の知らぬ技術で、  
すべての偶然は汝には見えない掟なのだ。  
一切の不調和は汝の理解を超えた調和であり、  
部分的な悪はことごとく全体的な善なのだ。  
思いあがりや、誤りやすい判断にもかかわらず、  
一つの真理は明白である。—あるものはすべて正しい。<sup>4)</sup>

との詩文で終わっている。もしこの詩文を地震の災禍を念頭において読むなら

ば、誰もがただちに賛同するようなものではないと思わざるをえない。家屋の倒壊や焼失、そして家族や人々の悲惨な死が調和 (harmony) であって、全体においては善 (universal Good) であるとは、なんとという非人間的、無慈悲なオプティミズムであることか。ただ、むろんポープの詩が地震の惨状を前にして書かれたものでもなく、そもそもオプティミズムを思想としてわかりやすく著したもののなのであるから、冷静に考えるならば、ポープの詩はさほど目くじらを立てて非難するようなものではないはずである。

上の引用にあるように、ポープはライブニッツのオプティミズム思想 (最善観) を簡単な形に「あるものはすべて正しい (Whatever is, is right)」と書き表したのである。しかし、ヴォルテールはみずからのリスボン地震の詩の中で、このポープの表現を「すべては善である (Tout est bien !)」ときわめて端的な口語的表現に書き直してしまう。ここにはヴォルテール一流の文章上の技巧があるといつてよいのであるが、このいいかえによって表現上に重要な差異が生じてくる。すなわち前者は哲学的語り口であるといえるが、後者は断定的であり、感嘆符がつけられていることからわかるように、扇情的でさえある。

このヴォルテールの表現に噛み付いたのはルソーであった。ルソーはヴォルテールのリスボン地震の詩を見てヴォルテールに長文の手紙を書く。ここにルソー＝ヴォルテール論争として知られるオプティミズムをめぐる論争が生じるのであるが、ルソーはヴォルテールのいわば心情に訴えるやり方を強く批判し、彼のオプティミズム理解についてこきおろす。

「ポープの詩は私の苦しみを和らげ、我慢するように導いてくれますが、あなたの詩は私の苦痛を激しくし、苦情を言わせるように刺激し、ぐらつく希望を除いてすべてを奪い、絶望へと私を導くのです」<sup>5)</sup>

さらにルソーは、ヴォルテールが < Tout est bien > と書いたことに対し、冠詞を一つ加えるべきだと主張する。つまり < Le tout est bien > とすべきだというのである。この後者は「全体は善である」という意味となり、もともとのポープ

の詩の趣旨に近いものだといえよう。

オプティミズムの真の原理は、物質の諸特性からも、宇宙の仕組みからも引き出すことはできず、ただすべてを統べる神の完全性から演繹によってのみ引き出されうるのです。<sup>6)</sup>

こう述べるルソーのオプティミズム理解は、おそらくライプニッツの宗教的世界観というべき「最善観」、そしてポープの立場を擁護するものであろう。ルソーの書簡はかなり長文であり、論理的ともいえず、ヴォルテールへの非難の感情がたいへん高ぶっているなかで書かれたものだということがわかるが、ことオプティミズム理解に関しては納得できるものである。

しかし、ルソーの非難は、はたしてヴォルテールに対する妥当な批判であったかどうか。ヴォルテールのリスボン地震の詩の終わりのほうには次のような表現が出てくる。

「ある日、すべては善いだろう (Un jour tout sera bien)」、そこにわれわれの希望がある。

「今日、すべてが善である (Tout est bien aujourd'hui)」、それは幻想だ。

賢者たちは私を欺いたが、神だけは正しい。

溜め息のなかで謙虚であり、苦しみのなかで従順である、

私はけっして摂理 (la Providence) に異議を唱えない。<sup>7)</sup>

この詩文を見ると、ルソーの非難が必ずしも的をえたものとはいえないということがわかる。つまり、ルソーがオプティミズム理解の要点として「すべて (tout)」と「全体 (le tout)」を分けたことと、ヴォルテールが「今日 (aujourd'hui)」と「ある日 (un jour)」とを分けていることとは、符合するものだといってよいからである。この「ある日 (un jour)」の一語を付け加えたことで、ヴォルテールの表現は思想としてのオプティミズムになる。そして「すべてが善である」

という文の性格が絶対的なものから相対的なものへと下げられる。さらにヴォルテールは、自分は摂理を認めるという文章を加えて念を押している。

つまり、結論的には、ルソーの理解とヴォルテールの理解とは異ならないともいえるのである。ヴォルテールの批判は、結局、オプティミズムを曲解した「賢者たち」に向けられていたのである。この「賢者たち (les sages)」とは誰を指しているかは明かされていないが、単純にこの世が善い場所だと説く楽観的な現世主義者あるいは聖職者であろう。

このルソーの手紙からほぼ3年後に、ヴォルテールは小説『カンディード *Candide*』(1759)を発表した。この小説は、ヴォルテール自身のオプティミズムについての最終見解であるといってよいが、またルソーの批判に対する答えという性格をもっている(※ヴォルテールはルソーの手紙に対していずれ返答するといっていた)。この小説で、オプティミズムを代表するパングロスという学者を登場させるが、彼および他の登場人物たちをこの世におけるあらゆる災難を経験させることで、能天気な「すべては善い」と唱えるような哲学者たちがいかに愚かで無責任な者であるかということを示すことを浮かび上がらせようとしている。しかしそれだけではないのである。

『カンディード』という小説は、作者であるヴォルテールのよって立つ理神論、そして合理主義の立場から創作された、ライプニッツあるいはポーブのオプティミズムを批判した書であると一般には理解されている。しかし、そうした理解は不十分であるか、あるいは間違っている。本書を通して読むと、自他の人生にたえず降り注ぐ災難があることを認めつつも、オプティミズム(摂理観)の立場を(ややシニカルに、学者風にはあるが)捨てることなく貫いているパングロスの姿が、ある共感をもって描かれているようにも見える。さらにこの書の末尾では、オプティミズムが必ずしも否定されるべきものではなく、むしろこの矛盾する生を理解することに資する面も持っていることを著者自ら認めているようにみえるのである。

つぎの引用は、本書末尾における波乱万丈の人生を経験したカンディード(主人公)と彼の師であるパングロスの対話である。

「わたしは自分たちの園 (notre jardin) を耕すべきことも知っています。」とカンディードはいった。

「いかにもそのとおり。」とパングロスはいった。「というのは、人間がエデンの園 (le jardin d'Éden) におかれたのは働いてこれを耕さんがためであった。これすなわち、人は休息のために生まれたるにはあらず、という証拠だ。」…… (中略)

「能うかぎりのこの最善の世界では、すべての出来事が繋がっている。その訳いかんとなれば、そもそも君が、キュネゴンドを愛したがために、したたか尻を蹴られて美しい城から追放されなかったならば、してまた宗教裁判にかけられたり、アメリカ大陸をほっつき歩いたり、殿をぐさりと突き刺したり、あの楽土エルドラードから連れてきた羊をすべて失ったりしなかったならば、君はいまここでこうして砂糖漬けの仏手柑 (ぶっしゅかん) やピスタシユを食うことにはならなかったろう。」

「いかにも、おっしゃるとおりです。」とカンディードは答えた。「何はともあれ、私たちの園を耕さねばなりません (mais il faut cultiver notre jardin)。」<sup>8)</sup>

パングロスは、この世界のすべての出来事が関連していること、したがって不幸な出来事もまた結局は現在のあり方につながっているということを人生に詠えて述べている。それを受けてカンディードもまた、人にはそれぞれの持ち分というものがあり、人は真摯に自分の領域を開拓していく以外にはないと応答するのである。

ここで展開されているオプティミズムは、いわば時間的に展開されたオプティミズムであり、あるいは摂理観である。「摂理 (provision)」とは宗教的には神の創造物に対する導きや計画のことであるが、哲学的に広い意味でとらえるならば、万物が相互に関連しあい秩序をもって存在していることである。そこに貫かれるロゴス (論理) を見いだすことが古代哲学の課題でもあった。ストア哲学では、世界を支配する永遠のロゴスと自己のうちに内在するロゴスとが一致するとし、その意味から「自然 (本性) に従って生きる」ということが安心立命の

処方だとしたのである。

『カンディード』におけるパングロスの摂理観は宗教的というより、哲学的なものだといってよい。人はこの摂理観をもつことで、災難や苦難も一定の意義・根拠をもつことを理解し、苦しみが癒されるという効用もあろう。主人公のカンディードは、師のいうオプティミズムを了解しつつ（ただし、師のくどい説明を途中でさえぎって）、自分自身のなすべきことを強調する。このことは、オプティミズムあるいは摂理観を、そのまま指導原理とするということではなく、自分自身がこのオプティミズムあるいは摂理観を活かす主体であることを示しているといってよいと思う。しかも「私たちの園を耕す」との表現は、まさしくわれわれ自身の精神を鍛えること、豊かな実りをもたらす土壌にすることが大切だということを意味している。

いいかえれば、この小説で、カンディード＝ヴォルテールはオプティミズムあるいは摂理という「理論」を、自己の主體的な「実践」の中に生かそうとしたことができる。そうしてはじめてオプティミズムが主體的、人間的な意味をもってくるということである。楽観主義といってもよい、しかしそれは強韌さを伴った楽観主義である。そこにこそ、行動する啓蒙主義者ヴォルテールの本領があるということであろう。

### 3 カントの地震論の内容

ところでカントの地震論は、上に述べたようなヴォルテールの詩も知らず、小説もいまだ世に出ていなかった時節に書かれたものである（※数年後に書いた「オプティミズム試論」1759では、ライプニッツの「最善観」を叙述し、世界全体の秩序・調和に信頼を置く立場を表明している）。

三つの地震論に共通していることは、基本的にカントの立場が自然科学的な探究の立場であり、客観的な論述、論理的な考察にウエイトを置いているということである。カントはいう。……大地の地下は中空となっていて、その空洞は広く各地域につながり、海底にまでつながっている。地震とは、その地下の空洞の中で可燃性物質が発火し、地下の水分が蒸気となりさらに極度に凝縮さ

れた結果、突然の爆発が起こる。これが地震である。また、これまであまり注目されなかったが、地震による洪水（※津波のこと）に関しても、爆発による海水への衝撃を流体力学的に考察することで一定の理解をえることができる。

こうしたカントの地震についての科学的な説明は、当時の自然科学の知見一般を超えるものではなかったようである（※地震学の歴史では、プレート理論が発表される20世紀半ばまでは、18世紀的な考えが残っていたといわれる）。つまり、カントの地震論の科学的考察においては、とくに独自な見解が述べられているとはいえないのである。

<第一論文>で自然科学的探究に関する叙述の部分を除けば、目をひく箇所は冒頭のまえがきの部分である。

万人の運命に襲いかかる大事件は、当然、称賛に値する知的的好奇心を呼び起こす。こうした好奇心は常軌を逸したあらゆることに遭遇して目覚め、大事件の原因について問いかけるのがふつうである。そのような場合、自然探究者は観察や研究から知りうることを公衆に対して説明しなければならない。……（中略）

いくら思い煩ったところで阻止しようのない運命の恐ろしさに悩まされずにすむこと、また、起こりうることがわかっていることがらを前にしても、恐怖心によってわれわれの実際の苦しみが増大しないことは、疑いなく摂理（Vorsehung）の賜物である。<sup>9)</sup>

引用した文章の前段では、カントは自身を自然探究者として位置付けている。そして、この地震論が知的な面からの探究の書であり、その探究考察の結果を皆に知らせるものであるというのである。探究の動機が「驚き」から始まったものだとしても、探究そのものは知的なものであり、しかもその探究結果を公にしなければならないと主張する。こうした主張には、カントの啓蒙精神を感じざるをえない。

また後段では、カントは摂理に言及している。彼がいうところの摂理とは、

上にも述べたように、万物の諸関係による世界全体としてのロゴス的な秩序ということであろう。こうした摂理観をもつことで、恐怖や苦しみが増減するということがカントは率直に認めている。のちに自分の著作にしばしばポープの詩を引用している。カントは神学的なオプティミズムには批判的であるが、一般に自然や宇宙の秩序に対しては深く感じるものがあった。

ここにカント自身のオプティミズムがあるということが出来る。上段で語るものは、知的探究の進展を価値あるものとしていることである。このことは18世紀という時代の一つの科学主義的傾向を映している。また、下段では自然の秩序としての摂理への信頼を語っている。これはおそらく彼の敬虔派的な宗教心そのものであるということもできよう。概して共に素朴でかつ無批判ともいべき立場ともいえるが、こうした彼自身のオプティミズムのもとに、若き時代のカントの天文学的、地球科学的な研究が進められていたことが理解できる。

<第二論文>は、アカデミー版で30ページ余のかなり分量のある、そして内容も多岐にわたる充実した論考である。ただし科学的分析とそれにもとづく考察の内容が論考のほとんどを占めているのではあるが。現代から見た地震学の発展史の上で、カント地震論の独自のものは無いといわれるが、しかし当時の地震学の概要を知ることができるうえでは貴重なものである。前書きにあたる個所でカントはこう述べている。

このような恐るべき災厄の観察は啓発的であり、人間をへりくだらせる。人間は神が命じた自然法則から好都合な結果だけを期待するという権利をもたないからであり、あるいは少なくともそれ（※人間には神によって特権が与えられているということ—石神）を失ったということに自覚させられるからである。このようにして人間はまた悟るにいたるかもしれない。人間の欲望が渦巻くこのたまり場が、自分の目指す目的をたとえ含んでいないとしても致し方ないということ。 <sup>10)</sup>

カントはここで、いわゆる人間中心主義的な考え方を批判している。ともす

れば人間は自分中心の考えをもつのだが、たとえば17世紀の初めにベーコンがこの自己中心的志向を「種族のイドラ」として指摘したように、それは事実と経験の前では消え去る幻影にはかならない。人間は自然を相手に特権をもってはいないのである。

第二論文の本文は、第一論文と同様、基本的に自然を自然として探究し理解するという科学的態度に貫かれている。そのかぎりにおいて人間への利益(効用)を論じることはない。しかしながら、カントが本文の最後の節でとりあげるテーマは、「地震の利益(効用)について (Von dem Nutzen der Erdbeben)」である。自然研究は客観的探究が基本だとしても、やはり人間にとっての意義を考えざるをえない。カントがこの節でいおうとすることは、地震は人間にとって厄災ととらえることはやむをえないとしても、そうした見方だけですますのは公平ではないということ。他方で地震が人間に与えてくれる面もあり、それについても論及することがフェアではないかということである。

カントは、この地震が与える利益について次の4点をあげている<sup>11)</sup>。

- ①地震は建物の倒壊などを引き起こすが、それは地震が生じやすい大地の上に建てたからである。人間は自然を順応させようとしているが、じつは自然に順応することを学ぶべきであるということがわかる。
- ②地震はいったん損害と思われる現象を引き起こすが、一方では利益になることも生じさせる。たとえば地熱による温泉であり、鉱物の生成である。
- ③地震や活火山の活動は、大気中にある不活性な物質を活性化させる物質、養分を含んだ蒸気を大気中に噴出する。
- ④地下の熱は太陽の熱がないときでも穏やかな熱を地上に与える。

もちろんこれらの利益(効用)を実際に人類が用いるまでの過程においては、(地震による被害のように)人間にとっての不都合が生じるということはある。しかし、だからといって「われわれはこれら利益のあらゆる準備をなす神の摂理に対して負うべき感謝の念を不遜にも忘れることができるであろうか」<sup>12)</sup>とカ

ントは問いかけている。ここにはカントの自然に対する深い信頼さえ感じることが出来る。しかし、本文の科学的記述はともかく、この文章をみて、実際のリスボン地震の人的・物的な被害への同情よりも、知的な探求による科学的知見の増加に関心をもつ学者風情を感じる人もいるかもしれない。それではカントという人物は、人間的なものに対してまったく無関心、無感覚であったかどうかといえ、それはそうではない。カントは人間愛の人であった。

#### 4 カントと人間愛

第二論文のむすびで、カントは人間愛について語っている。

このたびの天災がわれらの同胞のうちに作りだした、かくも多くの不幸な人々を目の当りにすると、人間愛 (Menschenliebe) が生き生きと目覚めてくるはずだし、彼らがかくも非情にも遭遇した不運の一部だけでもわがことのように感じられるはずだ。<sup>13)</sup>

やはりというべきか、カントはこのたびの地震の惨禍に対して、人間として同情を寄せたのである。ポルトガルからは離れたドイツの地では、直接、被害の姿を見ることはできないだろう。しかし、彼は人間同士の共感を大切なものと考えているといってよい。この感情は人間が人間に対してもつところの同胞感情であり、人類愛といってもよいものである。この人間愛の立場に対して、真逆の立場がある。

このような運命をいつも、壊滅的打撃を受けた都市が悪事のために受ける、当然の天罰と見なしたり、このような不運を正義ゆえに怒りをぶちまける神の復讐の目的と見なしたりするならば、人間愛に抵触することになる。この種の判断は、神的決定の意図を見通し、それによって解釈する、身の程知らずの罰あたりな知ったかぶりである。<sup>14)</sup>

当時、リスボン地震がもたらした壊滅的被害をめぐって、その原因があたかも旧約の「悪徳の町」の話のように、信仰を失った悪行に対する天罰だという解釈もなされた。カントはこうした見方に対しては断固として反対する。そうした解釈は摂理観を乗り越えてしまい、神に成り代って「神の意図」について云々するという、高慢な行き過ぎた解釈である。このような人間愛に反する解釈が出てくる背景にあるものは、自己中心、人間中心の利己的な考えである。

人間は自分が神の配剤の唯一の目的だとうぬぼれている。それはあたかも、神の配剤が世界統治において罰則を与えるにあたって、人間以外に注意を向けないかのようである。……（中略）世界の中で安らぎと喜びになるものは、思うに、まさにわれわれのためにこそあり、自然が人間にとってなんらかの災厄の原因となるような変化をきたすとしたら、それは、人間を懲らしめたり、恐れさせたりするため、あるいは人間に復讐するためにほかならないというのだ。<sup>15)</sup>

カントは自然現象が人間中心に理解、解釈されることを批判する。自己中心の見方からは単なるたなほた式恩恵論、内容なき天罰論しか論じられない。しかし、そうした見方に対してはただちに疑義が提出されうる（※なお、1762年に出版した『神の現存在の論証の唯一可能な証明根拠』のなかで、天罰論への批判がかなり詳細になされている）。

だがわれわれの見るところでは、限りなく多くの悪人が安眠をむさぼっており、地震はある国々で昔から住民の新旧にかかわらず起こっていて、キリスト教国になったペルーは異教の国だったところと同じように地震に見舞われ、それらの国々に勝って無罪とは僭称できない多くの都市がはなから地震による荒廃を免れたままである。<sup>16)</sup>

このカントの表現は、ヴォルテールのリスボン地震の詩にある「リスボンは、

快樂にふけるロンドンやパリよりも多くの悪徳をもったというのか。リスボンは潰滅し、パリでは踊っているのだ<sup>17)</sup> という表現と似ている。ただヴォルテールの表現は扇動的で、カントのそれは抑制的であるが。

かつてモンテーニュが『エッセー』のなかで、スペイン人が南アメリカを植民地化していく時代、原住民を野蛮だ (barbare) と表現したことに反対し、宗教においても政治においてもかれらはわれわれヨーロッパ人とまったく同等であると主張したように、カントはここでモラリスト的であるといってよいと思う。モンテーニュが「我々にとって必要なのは、自分で訪ねたことのある土地について正確に話してくれる地理学者 (topographe) である」(18) と言ったように、事物を判断するには正確な観察と経験、つまり事実に基づいた考察がぜひとも必要である。カントの地震論における科学的考察の立場は、まさにこの立場ではないだろうか。

「モラリスト (moraliste)」とは、たんなる教訓的な道德主義者とは対極的な立場に立つ人である。モラリストは人間性探究者 (ユマニスト humaniste) でもある。人間を人間としてみようとする人間愛の立場に立ち、同時に事実を事実として尊重する立場に立つ。つまりモラリストにおいては、人間性と科学性が両立しているといってよい。カントが1755年に私講師の職を得て数年後から「自然地理学」を講じつづけたことに、モラリストとしての先達であるモンテーニュの言葉の実践を読み取ることもできる。もっとも、地震論のカントは30代であり、いまだ知識重視の立場が勝っていたとはいえ、科学者カントの奥には人間愛のカントがいたといつてよい。40歳になったころ、ルソーを読んで「人間を尊敬することを学んだ」と述べているように、自分の中に兆していた「人間性」に深く開眼していったと思われるのである。

カントの人間論については稿を改める必要があるが、地震論において示されているカントの人間についての立場は、災難にあって苦吟する人間の側に立ち、なんとかして救済したいと思うまさしく人間愛の立場である。第二論文の末尾にカントが記したことは、「人々を脅かす滅亡を防止する」ことであり、そのためには人間愛の立場に立つべきであるという主張であった。

## 5 モラリスト・カント

カントがこの地震論を書いている1756年という年は、いわゆる七年戦争（1756-63）の直前にあたり、カントのいる東プロイセン、ケーニヒスベルクにも軍隊が押し寄せてこようとする、軍事的に切迫した時代であった（実際、1758年にはロシア軍が町を占領した）。そうした恐るべき戦火を前にした市民カントにとって、遠い地の地震の惨禍に対する救済策を考えることは、祖国の荒廃と破滅を救うことと結びついていたのである。地震と戦争という、一方は自然にかかわり、他方は人為にかかわるものであるが、人民の立場からすれば両者は同一の事態ともいえ、また同じ課題を含んでもいるのである。それは多数の人々が被害を受け、多大な苦しみを経験するという事態であり、それに対する救済をどうするかという課題である。

第二論文の結語として、カントはつぎの文章を加えている。

人類のこのような苦境を見るにつけ、高貴な心情に駆られてあらゆる面から災厄によって脅かされている人民をせめて戦争の悲惨から救おうとする指導者は、神の思いやりの御手にある慈善の道具であり、神が地上の諸民族につかわした、彼らはその価値がいかに大きいものであるかを決して測ることのできない贈り物である。<sup>19)</sup>

アルセニイ・グリガが「これは自然科学的論文としてはかなり異例な結語ではなかろうか」<sup>20)</sup> というように、いわば唐突に付加された感じさえする文章である。ここには、来たる戦争を前にして、人々のうえに予想される惨禍に思いをこらすカントがいる。待たれるものは、人々を救済する指導者である。そうした指導者は人間愛をもった者であり、高貴な心情をもった者でなければならない。「その価値を測りえないほどの、神からの贈り物である」という表現には、むろんプロイセン王フリードリヒ2世（啓蒙君主で大王といわれた、在位1740-86）への期待が込められているのであるが、同時にカントの強い人間愛への希求が

反映しているといつてよいと思う。

こうしたことから、この時代のカントは、客観性を重んじる自然科学者であるとともに人間同胞に同等な愛を抱こうとするモラリストであろうとしたといふことができる。

それゆえカントのオプティミズムは、素朴であったとはいえ、強靱なものもっていたといえる。浜田義文は『若きカントの思想形成』のなかで次のように述べているが、ここでの指摘は正鵠を得たものだといえよう。

たしかにカントは『地震論』その他で機会あるごとに、自然の災害の中に人類への道徳的教訓を読み取る性急を戒めた。しかしそれは狭隘な人間中心主義ないし実用主義的自然解釈を排撃するものでこそあれ、けっしてペシミズムや彼岸主義への傾斜を示すものではなかった。人間への効用を離れて、自然を自然自身においてとらえるという、初期のカントの客観的自然研究の態度の中に、じつはかえって自然に対する鞏固なる信頼、大いなる楽天があった。そう解すべきである。またカントが人間の卑小を語る場合にも、悲観的調子はない。そこにはつねに同時に、人間の偉大の面への敬意が払われており、しかもより根底にはかかる人間を生んだ自然に対する畏敬が据えられている。カントは人間を正当に宇宙における中間者としてとらえ、それによって自然から課された使命を立派に果たすことを期待したのである。<sup>21)</sup>

人間が身体であるとともに精神であるのと同じく、世界は物質的世界であるとともに人間的世界でもある。近代の始めにデカルトは身体（物質的なもの）と精神（非物質的なもの）を峻別したが、それは、両者を混同し相違を無視することで、人間の主体性と責任を失っている非近代的な世界からの脱出を意味した。精神の独自の働きを知るためには、身体を身体として理解することが必要なのである。そこには合理主義と共に合理主義を超えるものが自覚される。またこのことは、じつはけっして精神が高く、身体が下に置かれるということの意味

しない。身体が身体として理解され尊重されるには、精神の目覚めが必要なのである。

したがって、この区分は方法論的な区分である。というのは本来、身体と精神は一つでもあり、自然と人間も同じ世界の中にあるからである。デカルトが行ったこと、それは方法論的に両者を区分して、人間と世界のあり方を深く探求することであったはずである。しかし彼のこの遠大な目標は道半ばで終わり、その後の思想界は二元論的な方向へと流されていったのである。

大いなる自由そして自律があってこそ、自然を自然としてみるのが可能になるのである。またそうであってこそさらなる精神的高みを目指すことができる。ニュートンの『プリンキピア』巻末の「一般的注解」を読むと、そうした精神の高揚が伝わってくる。近代科学が成立する背景には、このような人間自身の自律、そして尊厳性の自覚があったことはもっと注目されてよいのではないだろうか。実際の近代の歴史にあっては、そうした意義が十分に評価されず自覚されてもこなかったのである。そこに、精神の発展も乏しく、科学技術の進展も自然破壊の方向へと陥っていった近代史の真の原因があるといえよう。カントは18世紀のオプティミズムのなかに、そうした問題性が含まれるということ直覚的に感じとっていたように思われる。

オプティミズムをめぐるルターとヴォルテールの論争は、結局のところオプティミズムの理解にかかわるものであった。そこから学びえたものは、自然現象を前に、いたずらに悲観的になったり、楽観的になったりする事の不毛さである。感情に走ったり、独断的に解釈をするのではなく、むしろ自然に謙虚に学び、そして同胞を思う人間としての気持ちを大切にすべきではないか。その意味では、オプティミズムを越えた自己を構築することが大事である。カントが選んだのはそうしたモラリストの方向であったといえる。そしてその先にカント哲学の原理である「自律」が生まれるのである。

モンテーニュの時代とカントの時代が異なるのは、自然科学的知見の増大である。自然科学の発展は、それまであいまいにされていたものをはっきり見え

るものとしていく。しかし、そこに必要なことは人間的なものを一層重視していくことでなければならない。30歳を少し越えたばかりのカントにとって、まだこのことははっきり自覚はされていなかったかもしれない。しかし、彼はすでにその方向へと歩みだしたのであり、この後、自然科学の基礎付け、さらには倫理・宗教の基礎付けという、時代の大きな課題へと向かっていくことになる。地震論の時代は、批判哲学が誕生する前の、若きモラリスト・カントの時代であったといえよう。

注

引用文については原文と訳文の出典をあげる。訳文は基本的に辞典としてあげたものにしたがっているが、筆者（石神）が原文の意を顧慮しつつ多少表現を変えたものがある。訳文の出典をあげていないものは筆者訳。

- 1) *Goethe Werke*, Bd.9, Verlag C.H.Beck, SS.29-31. 訳文は『ゲーテ全集9』山崎章甫・河原忠彦 訳（『詩と真実』第1部第1章）2003, pp.26-27.
- 2) 以下あげる著作のタイトル名の訳は岩波書店版『カント全集 第1巻』2000による。
- 3) Voltaire, *Mélanges*, Gallimard, c1961, p.304.
- 4) *The Poems of Alexander POPE*, New Haven Yale University Press, 1963, p.515. 訳文は『人間論』上田勤訳, 岩波文庫, 2001, p.34.
- 5) *Correspondence complete de Jean Jacques Rousseau*, Tome IV, Institut et Musée Voltaire, 1967, p.38. 訳文は井上堯裕『ルソーとヴォルテール』巻末の往復書簡による, p.200.
- 6) 同上p.45. 訳・同上p.208. この訳文で「演繹」と訳した語の原文は *induction* であり、通常は「帰納」と訳すが、ここでは訳文にしたがい「演繹」としておく。文章の意味としては「演繹」がよいと思われる。
- 7) Voltaire, *Mélanges*, Gallimard, c1961, p.309.
- 8) Voltaire, *Candide*, Classiques de Poche, Librairie Generale Francaise, 1995, pp.166-67. 訳文は『カンディード』吉村正一郎訳, 岩波文庫, 1990, pp.171-72 本稿では *jardin* を「園」と訳した。
- 9) *Kants Akademie Ausgabe*, Bd.1, S.419. 訳・『カント全集1』松山寿一訳, 岩波書店, 2000, p.275.
- 10) 同上S.431. 訳・同上p.289.
- 11) 以下の項目は同上SS.456-457 訳・同上pp.318-321の要約。
- 12) 同上S.458. 訳・同上p.321.
- 13) 同上S.459. 訳・同上p.323.
- 14) 同上S.459. 訳・同上p.323.

- 15) 同上 S.460. 訳・同上 p.323.
- 16) 同上 S.460. 訳・同上 pp.323-324.
- 17) Voltaire, *Mélanges*, Gallimard, c1961, p.304.
- 18) Michel de Montaigne, *Les Essais*, PUF, 1965, p.205. 訳・『エッセー (1)』岩波文庫, 1985, 第1巻第31章.
- 19) *Kants Akademie Ausgabe*, Bd.1, S.461. 訳・『カント全集 第1巻』松山壽一訳, 岩波書店, 2000, p.325.
- 20) アルセニイ・グリガ『カント』西牟田久雄・浜田義文訳, 法政大学出版局, 1983, p.42.
- 21) 浜田義文『若きカントの思想形成』勁草書房, 1974, p.175.